

移動する種

本橋 綾香

一見、その場から動かないように見える植物ですが、発芽に好条件な場所を探し求めるため、種には様々な移動する工夫が備わっています。いくつかの特徴的な種を例に、その多様な移動方法をご紹介します。



写真1 センニンソウの種

つる植物のセンニンソウ(写真1)は、タンポポのように、軽く柔らかい綿毛で風に乗って種が飛ばします。いくつも集まってついた種子の先端には、立派な白い毛束がつき、まるで仙人の髭のようです。この綿毛が「センニンソウ」の名前の由来にもなっています。

風を利用する種には、綿毛以外にも遠くに移動するための様々な形があります。カエデの木の仲間、プロペラのような翼の片側に種をつけ、枝先から落ちるときに翼で風をとらえ遠くに移動します。背が高くなるケヤキの木は、枝先近くの小さな葉を翼の代わりに使います。翼のどこに種がつくかで重心が変わるので、回転したり、風の吹く方向に乗ったりと、種によって飛び方にも違いが出ます。

植物の一部がバネのように動き、種を飛ばすものもあります。ゲンノショウコ(写真2)は実がはじけたときの形から別名「ミコシグサ」とも呼ばれます。熟して乾くと、果皮が縦に裂けて勢いよく巻き上がり、実から種が投げ出されます。

動物の体にくっついて、運んでもらう種もあります。センダングサの仲間などの種は、その移動方法から「くつき虫」と呼ばれます。トゲのついた種を衣服につけ、遊んだ方も多いのではないのでしょうか。コセンダングサ(写真3)やアメリカセンダングサは、タンポポのような花の集合体の1つ1つが細長い種となり、むき出しの状態です。種をよく見ると先端にトゲが分岐し、トゲの側面にも返し状の小さなトゲがびっしりとついています。この逆向きの小さなトゲで、草むらを通った動物の毛や羽などに引っかかり、くっついて運ばれるというわけです。

他にも、種の表面を粘液で覆うことでくっつくものもあれば、可食部をつけて食べられたり巣に運び込まれたりすることで運んでもらうものもあります。

自然の力を利用する、自分の力で飛ばす、他者に運んでもらうなど、種の移動方法は実に様々です。その植物の特徴や生息環境にあった方法をそれぞれ選択している様子には、感心させられます。



写真3 コセンダングサの種

冬の草むらは、残っている種を見つけやすく観察にはうってつけです。お正月休みに種の観察はいかがでしょう。冬の草むらは、残っている種を見つけやすく観察にはうってつけです。お正月休みに種の観察はいかがでしょう。